

「伝え合いたいこと」の主題表現に伴う鑑賞指導の方法論開発

Methodological findings in appreciation instruction: Expressing “intercommunication” as subject matter

立原慶一

「伝え合いたいこと」は知性的題材の範例として性格づけられ、その主題表現（表したいことを表す）をめぐる一連の実践的方法論研究が筆者によってこれまでなされてきたのであるが、本稿では授業形態に着目し、とくに表現行為と鑑賞行為の關係に重点が置かれる形でなされる。児童自らが描いた作品を「鑑賞」する際の指導法が、中学校美術科教育との連携という観点から方法論的仮説として考案・設定される。ついで授業実践することで、その有効性が検証されることとなる。

小学校の表現領域はとりわけ「造形遊び」において反知性的でパトスの傾向を濃厚にするが、それに対して主題表現と鑑賞領域はそれと正反対の知性的なあり方を示している。中学校の表現一般では反知性的な性格が一切影を潜め、専ら知性的なあり方を鮮明にし、その点で小学校高学年における主題表現に伴う鑑賞活動と深いつながりがあるからに他ならない。かくて表現主体の授業であるものの、「鑑賞」指導がそれに効果的に働くための方法が検討される。ここで知性とは物事を考え、理解し判断する能力であるとともに、生（生きること）や世界との關係の意味を切り拓く知的能力の謂いである。

表現行為と鑑賞のそれとの関わりについては、主題表現の体験を積んだ児童ほど鑑賞活動において、モチーフ・情景の選定法や造形・彩色法、材料・技法の活用法などの表現方法に注意を向けることができるものである。そのことは、絵画的イメージを効果的に造形化するために行われる表現方法の構想とその具現化が、次の洞察内容と重なり合い能力的及び意味的にほぼ同義であることを裏付ける。それは主題形成（主題表現に成功し、作品から感じ取られるべきもの）が表現方法の創意・工夫によって画面に実現される仕組みを理解することである。

「伝え合いたいこと」をめぐる主題表現にあつては元来、その性格が知性的であるがゆえに、鑑賞活動と必然的に往還する構造を備えている理が判明する。その題材化が今後、教育現場で意欲的に推し進められるならば、表現と鑑賞が統合的になされることになり、昨今、図画工作科の授業時数が減らされている中で、一方で、それは時間の効率的な節約に対しても貢献しよう。他方で、両者の相乗効果が生まれることによって、教科目標である造形表現力を育成し情操を涵養するのに、一層強く作用するものと思われる。それらは小学校図画工作科で獲得されるべき資質や能力として位置づけられている。

一連の実践的研究では、「伝え合いたいこと」の主題表現に関する信頼性の高い、実践的方法論を構築するべく理論的妥当性が考察された。それが教科目標を達成しようという命題を仮説として提示し、しかるのち題材実践によってその有効性を検証してきた。仮説へのフィードバックの際に、今回、とくに鑑賞指導の方法論が新たに開発されるなど、表現と鑑賞の有機的な連携という視点から、これまで構築されてきた実践的方法論が内容的に充実・発展することとなった。